

通告に従い一般質問を行います。市行政を司る立場として市民に対し、責任ある答弁を求めます。

## 陸前高田市総合計画後期計画の策 定について

先の本年第一回定例会における市長施政方針演述でも触れておりました、陸前高田市総合計画後期計画の策定について伺います。

現在、平成13年度から17年度までの五カ年を期間とする陸前高田市総合計画前期計画を基に、様々な施策が進められています。地方自治体を取り巻く様々な環境が変化し、計画が思うように進んでいない状況にありますが、そんな中、18年度から具体的な事業が開始される総合計画後期計画について本年度より、その策定作業に入ると表明されております。その具体的な計画立案作業について何点かお聞きいたします。

中里市長も議員として決定にかかわってきた、陸前高田市総合計画ですが、基本構想を十カ年とし、前期五カ年、後期五カ年に分け、具体的な計画を基本計画として定める手法を用いて、基本構想に基づいた後期計画の策定に入るわけですが、基本構想を策定した平成12年度時点と現在では、地方分権一括法の施行、三位一体の改革、そして市町村合併の急激な推進と地方自治、とりわけ本市のような税財源の脆弱な市町村を取り巻く環境に大きく変化がありました。このような中で、平成12年度に策定された基本構想を基に後期計画が作成されると推測いたしますが、「当面、自立を目指す。」としたものの4月に発表された行財政改革プログラム骨子では、各年2億円の財源不足が生じる見込みとされており、基本構想を具現化するどころか、前期計画の進捗もままならない状況が続いていることを鑑み、基本計画の基となる基本構想を見直すつもりはないかお伺いいたします。現在

進捗中の前期計画は、計画への市民参加はもとより、地域コミュニティごとに職員と地域が一体となって作成した計画ですが、その具現化、具体的進捗率は景気の低迷による税収の落ち込み、国の財政改革にもとづく交付税や補助金の見直しなどによって計画を下回る現状であると感じています。

基本構想は、地方自治法により議会の議決が必要な事項であり、その重要性、継続性は重々認識しているつもりであります。この間の社会経済情勢の大きな変化を現実としてとらえ、基本計画が絵に描いた餅、いや、実現に向け大きな方向の違いになり、より多くの労力が徒労に終わらぬよう、総合計画後期計画の策定にあわせ基本構想の見直しをすべきと考えますが、これからの陸前高田市の舵を握る中里市長の見解を求めます。

次に、後期計画策定に当たり中里市長の計画策定の基本方針について伺います。中里市長は、市長就任以来ソフトで柔らかなイメージを出されているように私は感じています。人柄だけでなく、政策決定や意思の表現についても同じような感をうけております。

先ごろ行われた、陸前高田市青年会議所が主催の大船渡市長、住田町長との3鼎談でも傍聴されていた市民の方からも、「自分の言葉で、あなたの考えを聞きたい。」旨の発言や、質問の中で「ボトムアップを基本としたい。」との市長の定例記者会見での発言内容についてありましたが、後期計画策定に当たっても、策定の基本はトップダウンで方針、指針を示すのではなく、中里市長の考えの基本とするボトムアップ方式を取り入れていく方針なのか伺います。私は、陸前高田市をこのような街にしたいとして市民に公約をされ、市民から選ばれたリーダーとして、まちづくりの具体的な指針である総合計画の策定に当たっては強いリーダーシップを持ってこれに当たるべきと考えますがいかがでしょうか。計画策定に向けた手法は様々あると思いますが、進むべき方向が示されていないままの作業では、その効率も上がらないのではないのでしょうか。策定に携わる職員をはじめ、様々な方々が、これでいいのだろうか、出来上がったものは市長のまちづくりの方針に合っているのだろうか、疑心暗鬼になりながらの作業となるのではないのでしょうか。策定に当たっては、財政面や市民参加との面

などから、自前での作成になるのではと推測いたしておりますが、厳しい環境の下、策定作業にかかる人々に無駄な労力と経費を費やさせぬよう、中里市長の総合計画後期計画策定へ向けた基本指針を示すべきと考えますがいかがでしょうか。

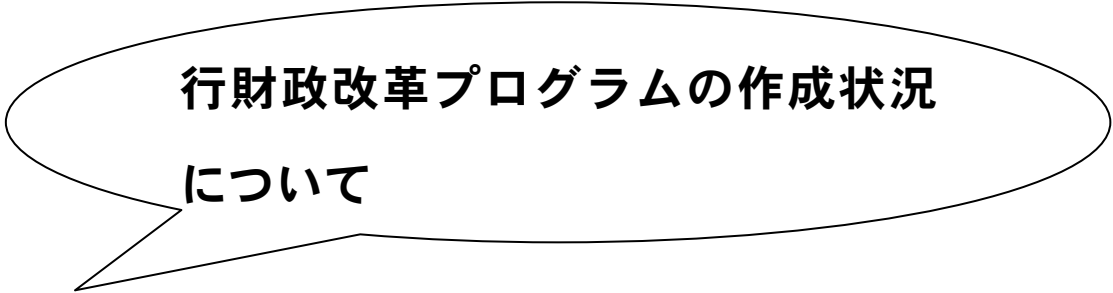
また、基本指針と計画のスキーム(枠組み)について現時点で示すことが可能であれば是非、お示し願います。

市長演述の中で策定には、公募をはじめ市民参加による後期計画の策定方法を表明しておりますが、策定に向けた具体的作業について伺います。

現在の陸前高田市総合計画は公募の委員はじめ、地域コミュニティとそこに住む職員が地域別計画を立案するなど、それぞれ職員、市民共同での手作り計画であります。後期計画については、公募募集や様々な形での市民参加を考えておられるとは思いますが、どのような形で、どのタイミングで市民や議会が計画作りに参画できるのか伺います。

計画は、この地「陸前高田市に住む人々の幸福を追求するもの」でなければなりません。が、池の鯉にならぬよう、交流を計画の基本のひとつに据えている本市としては、周辺市町村や、都市をはじめ他の地域と比較して魅力あるものにする必要もあわせて考えなければならない課題だと考えますが、市民参加とともに外から見た目、俯瞰した見方も必要と考えますが、様々な専門家の参加なども視野に入れられておるのか伺います。

また、計画策定に向けた具体的な作業スケジュールはどのようになっているかお示し願います。



## 行財政改革プログラムの作成状況 について

次に、行財政改革プログラムの作成状況について伺います。

厳しい財政状況の中、「自立」できる陸前高田市経営のため、本年8月を目途に行財政改革プログラムの成案作成に向け目下、鋭意作業中のことと思いますがその作業内容と進捗状況について伺います。

本プログラムは、今後の陸前高田市経営の大きな柱となるものではないかと感じております。三月定例会の予算、議案審査の中でも当局の答弁に度々「現在、行財政改革プログラムを策定中であり、それに基づいて云々」との答弁が幾度となく重要な質疑の中されておりました。本当に重要な考え方というか具体的な計画になるものと感じているところです。

先に発表された行財政改革プログラム骨子からすると、策定される改革プログラムは「人件費の抑制」から「使用料、手数料の適正化」まで12の重点施策を掲げており、その範囲は市の行政全般にわたるものとなっており、まさに聖域無き改革とっていいほどの内容となるものと予測されます。

今後予想される事務量に対する必要職員数の把握、計画作業が開始される総合計画後期計画を実行するための事業との整合性など、単なる人員削減計画とか民間委託の推進やアウトソーシングの活用といった、現在との比較だけで行える作業ではないように感じられますが、どのように考え進められているのでしょうか。中里市長が進める施策と矛盾するような点はでてこないのか、行政が行っていた経費より少ない費用で仕事を民間に委託するのか。それでは、単に民間事業者、しいていえば市民に痛みを押し付けることにはならないかなど広範囲に亘る分析・比較作業が必要となると考えますが、切迫したし財政を鑑み、来年度から行えるようにとことで成案完成時期が8月としたものと受けとっておりますが、どのような体制で策定作業を進められているのか。また、6月も中旬に差し掛かっている現在、どの程度作業が進捗しているのかお伺いいたします。

本年度予算を編成する際も、交付税の削減や臨時財政対策債の発行額の制限などにより大幅な財源不足に陥り、市債管理基金から4億8千万円余りを繰り入れ歳入の確保を行ったのが現状でした。行財政改革プログラム骨子でも財政危機の要因として、市税、

交付税合わせて平成12年度と平成15年度決算見込み比較で、3年間で約8億円もの歳入の落ち込みと、歳出面で扶助費の増加傾向とバブル崩壊以降の景気浮揚対策に基づく公共事業にかかる公債費の大幅なふくらみが重い負担になっていること等をあげています。本来ならこの公債費負担を計画的に軽減すべき財源である市債管理基金を緊急避難的とはいえ、本年度の歳入不足に充てておる状況からすると、まさに危機的な財政状況であると考えられます。骨子では、財源の不足額を各年2億円程度と試算し、収支改善の目標数値とされています。今年度予算編成に当たっては、市債管理基金から5億円近い繰り入れを行っており、来年度以降についても交付税や市税収入の伸びが期待できない現状からすると、本当に収支の改善目標額が2億円で妥当なのかも精査する必要があると思いますが、単に収支改善目標だけでなく、重点施策を実施するための推進財源の確保も必要なのではないでしょうか。後ろ向きの行財政改革プログラムになるのではなく、市民が希望を持てる行財政改革プログラムにする必要があると私は考えます。そこで伺いますが、現行の収支改善額の明記だけでなく、市政運営上の重点施策遂行に要する財源の確保額についても明記する考えはないか伺います。

行財政改革プログラムは骨子の副題につけられている「自立できる自治体をめざして」とされているように、「当面自立」との選択をした責任を果たすものでなければならないが、あわせて、その内容は市民が求める行政ニーズを実現するための「行財政の確立」を目指すものであることは基本であると考えますが、行財政改革プログラムの内容が市民や職員に負担を強いるものであってはならないと考えます。中里市長は三月定例会において、市民に負担を求めるだけのものであってはならない。行政内部での様々な見直しと改善が先との趣旨の発言をされていますが、市長の行政運営に当たる基本のように感じました。その考えには共感いたします。

しかし、一方で人員削減や人件費の抑制などにより結果的に負担を強いることになる職員や、投資的経費の削減による公共事業の削減や、扶助費、使用料・手数料等の見直

しによる市民への負担が垣間見える骨子となっていますが、この計画実施期間である4年間のトンネルを抜けると明るいものが見えてくるというような、希望というかビジョンをあわせて表記することが必要ではないかと考えます。今、様々な計画では市民に「協働」との言葉を用いていますが、言い換えれば受益に応じた負担と申しますか、ある程度の負担を求めています。単に負担を求めるだけ、縮小傾向だけのものであつては協同参画を求められていく市民や、計画を実行し実際に行政運営に当たる職員のモチベーションが低くなるようなものであつてならないと考えますが、行財政改革プログラムではどのように考えるのか伺います。

## 観光・交流の振興について

次に、本市産業の柱の一つとされている観光・交流の振興について伺います。中里市長は、三月定例会での本年度の市政方針演述の中でも、産業の振興の分野で都市との交流や観光産業の振興についてうたわれておりました。本市の観光については、4月に新たな観光拠点として黒崎仙峡温泉がオープンし連日賑わいを見せ、当初の見込みを大幅に上回るペースで来場者が訪れているとのことで、大変喜ばしいことだと感じておりますが、一方では施設までの案内板が不足しているため不案内だとか、施設が狭いなどの声も寄せられているようです。私も何度か足を運んでみましたが、開館前から並んでいる方や、もう10度目だという横田からバイクで訪れている年配のご婦人、夕方になると広田の地域の方々が銭湯に通うようにというか内風呂を使うような感覚で利用されていることは、観光面だけでなく地元の方々にも利用される素晴らしい施設が出来たと感じています。

その中で、いくつか感じたことがあります。オープン間もなからなのか、年度初めだからなのかと思いましたが、せっかくおいでくださった観光客の方々に、市内の観光情報を提供できるような施設マップ的な資料が無いように感じています。市内には、様々な観光資源と観光施設があります。観光協会では高田八景なるものも選定されたと聞き及んでおりますが、

せっかくの観光客の皆さんを少しでも市内の観光施設を回っていただく、少々言葉が悪いのですが足止めをする。リピーターを増やす。そのために、産業振興、交流基点、地域振興の拠点として市内には様々な施設が整備され、生出地区の炭の家から広田の黒崎仙峡温泉まで市内各地に広がっております。市内の各施設にこのような施設と観光資源を表した、施設・観光マップを作成し、掲示したり、手にとってもらえるようなパンフレットを作成し積極的に活用すべきと考えますがいかがでしょうか。また、各施設間での有機的な連携も必要と考えますがお答え願います。

施設間の有機的連携には、交通アクセスの改善も必要となっていると感じています。車社会であり、公共交通機関利用者より自分たちの車やチャーターした交通手段で観光地を訪れる方々が大半を占め、さらには当市の観光施設は、最寄りの公共交通機関から離れているところが多いことから、アクセス道の整備が必要ではないでしょうか。これは、観光客のためだけでなく、市内住民の生活利便の向上にもつながるものだと考えます。市財政が厳しい折、簡単に出来ることではありませんが、見返りを得るため、観光産業の発展振興のための投資も必要と考えますがいかがでしょうか。当局の考え方をご説明ください。

次に、市内には様々な施設があります。施設の管理運営方法は、公設公営、公設民間委託など施設によって色々な形がとられています。施設の管理区分も農林課であったり、商工観光課であったりと、また、その施設の性格付けもあいまいなものがあったりしているような気がしてなりません。市民会館や図書館、博物館といった公設公営で市民の福祉や文化教養に寄与することが目的の施設と、黒崎仙峡温泉やタピックなどの民間施設と競合するような施設では、管理運営方法が異なることは当然のことと考えますが、このような施設でも、公設公営で管理されているところと、民間に委託し任せている施設がありますが、観光面に寄与する施設については公設民営形態を積極的に取り入れ、入れ込み客への対応などもう少し民間感覚を持って管理運営というか経営に当たる必要があると考えますが、当局の考え方を伺います。

最後に、当市の大きな観光資源である高田松原を夏の季節だけではなく、春や秋といったシーズンにも訪れていただけるような方策が必要と考えます。高田松原地区は、タピック、県立高田松原野外活動センターを含めると憩いの環境としては非常に優れた地域であると考えられますし、プランナーと呼ばれる企画立案を生業とする方々からも高い評価を得ております。特に、高田に入ったとたん開ける眺望と明るい雰囲気は海とともに、「お花畑」を連想させる雰囲気があるそうです。4月、5月の季節には一部古川沼周辺に桜が植樹され目を楽しませてくれています。タピック周辺や野外活動センターとも協力しながら、桜を楽しむ場所として高田松原地域は家族づれにも団体にも非常に適しているのではとの声も聞かれます。この地域には大船渡市の盛川沿いに桜並木がありますが、通路であり人々が憩える環境ではないようです。駐車場が確保され、水辺があり、海浜がある。ここに、桜を中心とした憩える場所が広がったら、高田松原を訪れる季節が夏だけでなく春にも広がるのではないのでしょうか。現在、様々な指定がされ、種々の規制がされている高田松原地区を観光資源として総合的に見直す時期に来ているのではないかと考えますが当局の見解を求め、一般質問を終了します。